

公開シンポジウム

宗教の創りだす絆——信仰による交わりの意義と可能性——

宗教は直接的には神仏といった宗教的実在への人のかかわりを基盤とする人間の営みであるが、デュルケームの指摘を待つまでもなく、それは同時に共通の価値観やそれに基づく同胞愛の倫理に根差した強い人と人の絆を生み出してきた。しかし近年、教団組織の拘束を嫌い個人による自由な霊性の探求を志向する傾向、すなわち宗教意識や行動の個人化や私化の傾向がしばしば指摘されている。また一方で「カルト問題」では、信仰集団において生じた内閉的な、あるいは絶対帰依的な関係性がもたらす危うさが厳しく問われた。果たして宗教は人々をつなぐ絆を失いつつあるのだろうか。また、信仰の創りだす絆は、現代においては自立した人々の開かれた関係性とはなじまないものなのであろうか。

われわれを取り巻く社会の中では、「無縁社会」という言葉に象徴されるように、血縁や地縁など従来の共同体的な社会的絆の衰弱や、人々の社会的な孤立化が憂慮される状況が進行している。そして市場原理による効率性の追求が強調され、協同より競争、共助より自助を重視する社会環境もますます拡がりつつある。またグローバル化の進展は国際的な人流を著しく活発化させ、慣れ親しんだ文化・宗教的環境からの人々の切り離し、移動先での文化・宗教的なマイノリティー化や周囲の社会とのコンフリクトなど様々な問題を生起させている。

こうした状況の進行へのカウンターバランスとして、いまや社会的絆や共助の回復というテーマが社会的な課題として各方面で強く意識されるようになってきている。こうした時代の課題への対応に際し、果たして宗教の創りだす絆はどのような意味や可能性を有するのだろうか。関西学院はかつてキリスト教社会運動家の賀川豊彦が協同組合運動を創始した神戸に生まれたキリスト教主義の大学である。また近くは阪神淡路大震災の被災地として共助の精神の重要さを再確認した経験を持った。今、東日本大震災という未曾有の災害に直面する中で、改めて宗教信仰の創りだす絆の意義や問題点、あるいは宗教信仰の違いを超えて人々をつなぐ可能性や課題について問い直してみたい。

(プログラム委員会)

パネリスト

中道 基夫 (関西学院大学准教授)

渡辺 順一 (金光教羽曳野教会長)

三木 英 (大阪国際大学教授)

小杉 泰 (京都大学教授)

モデレーター(司会) 對馬 路人 (関西学院大学教授)

開催日 二〇一一年九月二日(金)

会場 関西学院大学 B号館 一〇一教室